



うちま (ウチマ)

内間の変遷

内間は、勝連半島のほぼ中央に位置し平安名と隣接している。「内間平安名」と連称されている。言い伝えによれば、内間は当初、勝連城跡西の下方御殿坂付近にあったが、その後人口の増加により現在の与那城三叉路の「よかつデイスービス」の裏側、山手付近の大田原に移動。その後一七八年与那城間切と勝連間切が分離された時に勝連城跡の東側の前川原に田地を供与され、一時移転したが、耕作に不便なため、元の島(村)に移したという。このことについては、実際の移動はなかったとの話もある。

やがて人口の増加や労働など日常生活に不便をきたしたので、現在地に移動したといわれる。

王国時代の和文学者平敷屋朝敏が平敷屋に住んでいるとき勝連城に足を運び、月をながめ、その帰りに内間を通っている。その時に「ふるさとや 一本のまつのそれひとつ むかしながらの

おもかげにして」と、以前この地で縁のあった女性を偲んでいる(『貧家記』)。かつて勝連小学校敷地内の踊りナーにアガリマーツーという美しい松があったという。朝敏が詠んだ松がこの松だったとすれば歴史の奥ゆかしさを感じる。

『勝連村史』は、「内間の人たちは、昔から(内間クメキヤ)と呼ばれて物事をおろそかにせず恭謙で礼儀正しいといわれている。これは今日でも内間住民の言葉遣いの慎重さ対応振りの丁寧さ等、更に経済的始末家の意味も含めて、よくその通用性を道破したものであることは、衆目の認める所であるう・・。」と記している。

このことは筆者が聞き取りに行ったときも内間の人たちの対応のよさ、人柄のよさを実感したものである。このような地域の美風はこれからも継承しつつ周囲に広げていきたいものである

内間の語源と意味

内間地名は西原町と浦添市にあるが西原町の内間の発祥の地は、内間川の中流山間の地、入りこんだところであった。浦添市の内間は安謝川と沢岬川の合流地点付近に位置し、古い集落は内島と呼ばれた。この内島が内間になったと考えられる。なお『沖縄地名考』(宮城真治)は「安謝港の奥にある」からとしている。「奥にある」は「川口から内島のほうにあるところ」の意味に解される。

また本市内の栄野比、川崎には小字として内間川原があるがいずれも天願川中流域の山間の地にある。このことから内間という地名は「川の流域の奥まった山間の地にあるところ」と考えられる。

しかし、先に述べたように本市の内間の発祥の地が勝連城跡西下であったことからすると

- 一、勝連城跡西の懐、内側に位置するということの意味で、「内間」と呼んだのではないか。
- 二、勝連城跡西の淵側あるところのフチが転訛してウチとなり内間となったか。

以上の二点の考察は、あくまでも推量の域を脱しないが試みとして述べてみた。

ちなみに淵(縁)が、ウチに転訛した例として、国頭村の「茅打バンタ」は、元は「茅淵バンタ」だったという。その風の強さや状況から茅打バンタと呼ばれるようになった。

なお、内間の「間」は外間や上間、仲間のように場所をしめす語である。

内間ホーヤー木と馬場

内間公民館の入り口付近に内間のシンボルとして内間ホーヤー木と呼ばれるガジュマルがある。数百年の歴史を重ねたといわれるが、残念ながら現在は昔日の姿を見ることはできない。台風で倒壊し、現在はその跡に二代目の

ガジュマルが植えられている。その枝の下に「内間這うや木ぬ 枝持ちぬ美らさ 内間みやらびぬ 身持ち美らさ」の碑が建っている。



【二代目ホウヤー木】

その碑のすぐ横に並ぶように馬場跡の記念碑が建っている。ガジュマルの前の通りは広々とした通りがまっすぐに延びている。ここは馬場(シマイ)と呼ばれてかつてアブシバレーのときに豊年満作を祈願してシマハラセー(競馬)が行われたところである。この馬ハラセーは、単に速ければいいという競技ではなく馬の足並みの美しさや動作などが勝敗の対象になった。

この日には近隣の村々からも参加し、乗り手もスター並で花形だったという。見物客が弁当もちでつめかけ、娯楽の少なかつた農村では人々にとつて待ち遠しい行事のひとつであった。現在この馬場は綱引きの場所として区民融和親睦の役を担っている。